

## 03 ドブロヴニク (クロアチア)

パラダイスを訪れる

### ●象牙色に輝くまっすぐな道

「この世でパラダイスを見たいものはドブロヴニクを訪れるべきである」(バーナード・ショウ)<sup>\*1</sup>

ドブロヴニクを訪れて、アドリア海を見ないことは不可能である。紺碧の海とともに、石灰質の白い岩山にマツやオリーブの緑とオレンジ色の屋根瓦が点在する景観が旅行者を迎える。やがて、きわめて堅固で精度の高い石積みの市壁に出会う。この市壁の内側が旧市街である。

市壁西側のピレ門からなかに入ると、驚くべき景観が待っている。まっすぐの道が、地中海の光を浴びて、象牙色に輝いているのである。道だけが輝いているのではない。両側に整然と並ぶ建物の外壁も、遠くの山肌も同じ色である。市壁内側のあらゆる壁と地面が大理石でつくられていて、その地面が長年にわたって人の足で磨かれたから、そこに壁の色と光が映っているのである。

左手前には教会の鐘楼がそびえ、正面突き当たりにも同じような形の時計塔が見える。このふたつの塔の間に、左右とも見事に壁面のそろった家並みが



図1 市壁の上から見たプラツァの景観

続いている。このまっすぐな道はプラツァと呼ばれ、300mほどの距離だが、あまりにも統一感のある景観に舞台を見ているような感覚を覚える。奥行き300mの舞台はとてつもなく大きい。

プラツァに沿った家並みは、一見すると大きさも高さも窓割りもほとんど同じで、屋根の形も瓦も同じに見える。よく見ると少しずつ違ってそれを見比べるのも楽しいのだが、この様式の一致は、これらの建物がある時期にいつせいにつくられたことを物語る。実はこの街の建物の多くは、1667年に襲った大地震後に「大急ぎで、しかし調和よく」<sup>\*2</sup>つくられたという。真に驚くべきは、震災復興で急ごしらえにつくって、これほど優れた街並みが出現したということである。

### ●13世紀からの都市計画

現在見られる街の起源は7世紀頃だという。この頃はラグシウムというラテン語の名前であった。12世紀の後半からドブロヴニクというスラブ系の呼び名となった。地中海交易で重要な位置をもちはじめたこの街はヴェネチアの支配下に入るが、この地方でハンガリーが力をつけたことで、その保護下で1358年に自由都市として独立する。この共和国はその後トルコの保護下に移りながらも、東西交易の要衝として自治を保ち続け、実に19世紀まで続いた。

ラグシウムの時代、街は水路で隔てられた島の上につくられた。街は次第に拡がり、ドブロヴニクと

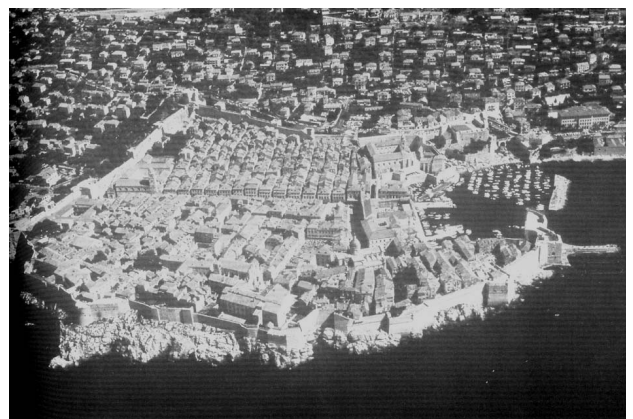


図2 中央がプラツァ、手前海側がラグシウム時代の地区、山側には別荘が点在する(文献②)

\*1 イギリスの劇作家。社会批評家。(1856~1950)

\*2 文献①,p.85

\*3 かつては造幣局、税関、アカデミーなどが置かれた。現在はヨーロッパ有数と言われる古文書館。都市法をはじめ、11世紀以来の重要史料を所蔵する。

\*4 総督(レクター)は有力商人でもある貴族のなかから選出され、1ヶ月ごとに交代するという徹底した民主制をとっていたという。

\*5 一方、ボスニア・ヘルツェゴビナのモスタールの街では、ムスリム人勢力の弱体化を目的に名橋といわれた橋がクロアチア軍によって破壊された。事の判断は簡単ではない。

呼ばれるようになった頃、水路は埋め立てられ、陸続きになり、市街は大きく拡張された。当然、水路跡は最も低いところとなり、ここを挟んで両側に市街地が形成されることとなった。この水路跡がプラツァとその周囲なのである。大通りであるプラツァには、そこに両側から流れ込むように直線の道路が計画され、建物の大きさと形を規定した。1272年という古い時代に定められたドブロヴニク都市法は、基本的に現在に至るまで街の骨格を決めている。

街の中心となったプラツァの周囲には重要な建築物が作られていった。特にルネサンス期につくられたスポンザ宮殿\*3と総督宮\*4は特筆すべきである。どちらも1階は古典主義のロジヤ、2階はヴェネチアンゴシックの細長い窓をもっている。ルネサンスとゴシックがこれほどバランスよく上品にひとつの建物に納まっている例を他に知らない。

ドブロヴニクには、大国の間にありながらも自治を保ち、自分たちの都市を形成するルールとコード、それに優れたデザインセンスと高い建築技術の蓄積があった。それだからこそ地震に襲われても、そのあとにつくられるべき街が見えていたのである。

### ●景観はだれのものか、歴史はだれのものか

1991,92年、旧ユーゴスラヴィア紛争でドブロヴニクは全建造物の7割近くが被害を受けた。ユネスコはこの街を「危機にさらされる遺産リスト」に登録した。国際社会はユーゴ連邦軍による攻撃を非難



図3 プラツァ沿いの建物 1階のドアを兼ねたアーチが特徴的

### ●参考文献

①バリシヤ・クレキッチ、田中一生訳『中世都市ドブロヴニク』彩流社、1990

②Z.PEKOVIC, DUBROVNIK: nastanaki razvojs rednjovjekovnoga grada, MUZEJ HRVATSKIH ARHEOLOSKIH SPOMENIKA-SPLIT,1998

③K.HORVAT-LEVAJ, BAROKNE PALACE U DUBROVNIKU, INSTITUT ZA POVIJEST UMJETNOSTI-ZAGREB,2001

④A.IVELJA-DALMATIN, DUBROVNIK, TURISTICKA NAKLADA do.o.-ZAGREB,2001

⑤A.TRAVIRKA, DUBROVNIK: HISTORY・CULTURE・ART HERITAGE, FORUM-ZADAR, 1998

⑥陣内秀信『都市の地中海』NTT出版、1995

⑦朝日新聞「戦争・災害…世界遺産に危機」,2002.11.19

し、紛争はクロアチアの独立によって終結した\*5。

世界遺産が攻撃されたときの国際社会の論議は、遺産は特定の国のものであることを超えて人類共通の財産であるという考えに基づいている。いわば、世界遺産が攻撃されるとは自分たちの遺産が攻撃されるということなのである。この考えはそのまま景観における個人と公共の関係に適用できる。景観はそのほとんどが自分の所有ではない。しかし、それらを自分のためと考えることで、街や地域の共通のルールが形成される。ドブロヴニクの優れた都市景観はこのような考えがあたりまえに採られてきたからつくられたのである。そして、景観として目に見えるものはすべて過去のものである。この事実は歴史に対する責任を意味する。景観を改変することは、過去への説明をとめない、未来における記憶をつくることである。

ドブロヴニクでは紛争終結後、ただちに攻撃前の姿に街を戻すことが採択された。ここでまた地震のときと同じように都市をつくってきた蓄積が役立った。街は「危機リスト」から外され、今行くとオレンジ色の屋根がひとときわまるい。修復で多くの瓦を葺き直したからである。3千万ドルの修復費の大部分はクロアチア政府が観光振興を狙って負担したという。そして、この街はヨーロッパのリゾート都市として完全に復活した。この街を訪れ、歩き、自分のためのパラダイスと感ずること、それがだれにでもできる貢献ではないだろうか。



図4 右がスポンザ宮殿 1階のアーチと2階のゴシックが絶妙のバランスで共存している